

利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版

海 野 一 隆

は し が き

一五九五年（万曆二十三）のマカオ到着から一六一〇年（万曆三十八）の北京における客死に至るまでの一五年間に、マテオ・リッチ（利瑪竇）は五回にわたって世界図を作製している。⁽¹⁾ それらの図のうち、原刊本が残っているのは、周知のように万曆三十年（一六〇二）刊の『坤輿万国全図』とその翌年に刊行の『両儀玄覽図』とであるが、後者の現存本がわずかに二部であるのに対して、前者は清代の刊本を含めると計七部（一部は主図のみ）が現存している。⁽²⁾ また、前者には江戸時代のわが国および清代の本国における模写本も伝わっており、それらをも含めて相互に内容を比較された青木千枝子氏は、九重天図中の記載、李之藻序文中の語句、ポルトガル国名の表記において、現存明刊本の『坤輿万国全図』とは異なる江戸時代の模写本を明代における改訂版の模写と判定された。⁽³⁾ しかし、この判定には事実確認の手順において不徹底な面があり、結果はむしろ逆となるべきものである。すなわち、江戸時代の本邦模写本（二部を除く）の原本は、今は残存しない初版本であり、現存明刊本こそ改訂版にほかならないのである。⁽⁴⁾ 以下、筆者の見解の根拠を明らかにし、さらに現存刊本相互の関係を検討することとしたい。なお、本稿

において用いる海外諸地域の名称、例えば朝鮮・シナなどは、その他を含めてすべて文化地域ないしは文化圏としての呼称であつて、政治区画でないことを断わつておきたい。

一 改訂版としての現存明刊本

現存する江戸時代の『坤輿万国全図』模写本のうち例外的な二点を除くと、いくつかの点で現存明刊本と相違する。原刊本に最も忠実と思われる土浦市立博物館所蔵山村才助旧蔵本をもつて代表させると、その相違点は第一表に示すように、四カ所を挙げることができる。それらが日本での模写に際して変更を必要とした事項・内容でなかったことは言うまでもあるまい。以下当然のことながら、「本邦模写本」と称する場合には、現存明刊本と同じ内容を示す例外的な二点は含まないものとする。さて、第一幅上部の九重天図の「二十八宿天」の「七千年」と「四萬九千年」とのちがいについてみると、第一表に示すように、翌万曆三十一年（一六〇三）刊の『兩儀玄覽図』においても「七千年」と記載されており、「四萬九千年」はその後の改訂であつたことを思わせる（第1図参照）。事実「四萬九千年」の文字間隔は他の部分より狭く、埋木による改訂であつたことは歴然としている。埋木による改訂であることが一層明瞭なのは第三幅の李之藻序文の初行と第二二行であり、拙劣な技術の故に「唐賈南皮畫寸分里」および「異人異書世不易遺」は正確には読み取れないほどである（第2図参照）。ともかく、改訂以前の語句が「元朱思本畫方分里」「語不云乎在夷則進」であつたことをわれわれに知らせてくれる本邦模写本の存在意義は極めて大きいと言わざるを得ない。初行の場合についてみると、李之藻としては、「元朱思本」では時代が新し過ぎると

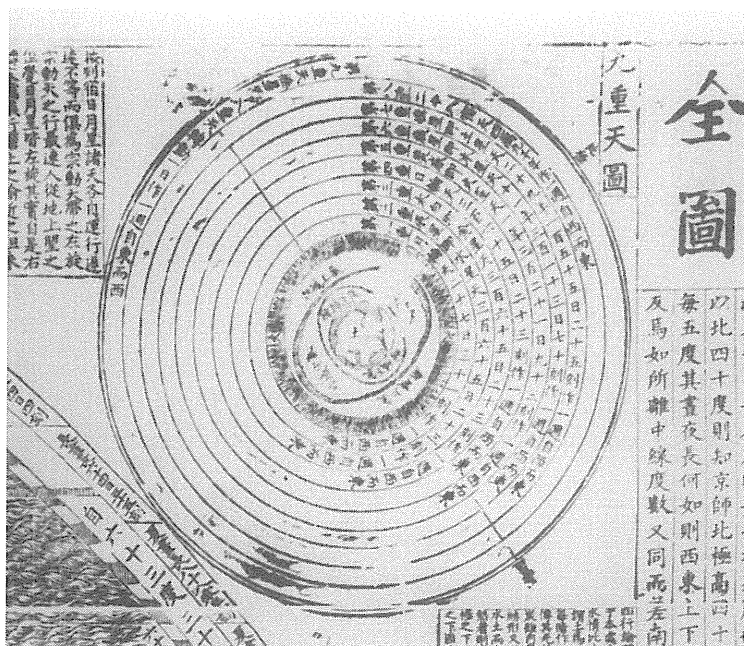
判断して、「唐賈南皮」（賈耽）にまで時代を遡らせ、シナの科学的地図学の出発が早いことを誇示したかったにちがいない。

以上によるのみでも、現存明刊本が改訂版であり、本邦模写本の粉本としての原刊本がそれに先立つ版であったことは疑えないところであるが、かなり根本的な改訂が行われている第六幅のポルトガルの国名表記の変更の理由

第一表 現存明刊『坤輿万国全図』と江戸時代初期模写本との比較

所 蔵	九重天図（第一幅）	李之藻序文（第三幅）		シナ一帯（第四幅）	ポルトガル（第六幅）	備 考
		初 行	第二行			
土浦市立博物館 （本邦模写本）	二十八宿天七千年	元朱思本畫方分里	語不云乎在夷則進	大明一統、大明海、大明聲名文物之盛	拂郎機、拂郎機乃回回誤稱本名波爾杜曷爾	宮城県図書館所蔵本邦模写本も同じ
宮城県図書館 ヴァチカン図書館	二十八宿天四萬九千年	唐賈南皮畫寸分里	異人異書世不易遵	同 右	波爾杜瓦爾（右の注記の抹消のあとあり）	主図のみ残存の旧内閣文庫本もこの版
京都大学図書館 （参考）	（十一重天図）	（李之藻序文はなし）		大明一疏、大明海、大明聲名文物之盛	波爾杜曷爾、即回回所稱拂郎機	全八幅
両儀玄覽図						

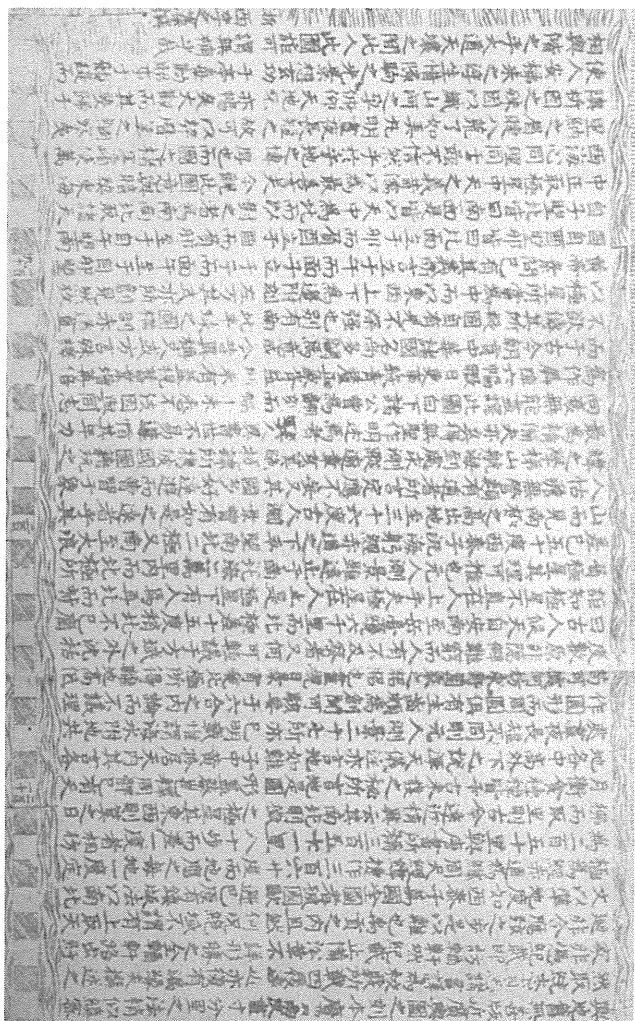
〔注〕 厳密に言えば、青木千枝子氏が指摘されたように、第六幅の「木島」（マデイラ島）に関する注記における「拂郎機」「拂郎機人」から「波爾杜瓦爾」「波爾杜瓦爾人」への変更も相違事項に該当する。青木千枝子（註3）論文）。ところで、その一方、改訂に洩れている箇所として、第二幅下部の呉中明序文第一〇行および墨瓦蟻泥加命名の経緯を述べる記事の第一行、第五幅のアフリカ南端沖合の注記の冒頭の計三ヶ所があることを鈴木信昭氏が指摘している。（朝鮮儒学者李睟光の世界地理認識『朝鮮学報』一九二輯、平成十六年）。



第1図 利瑪竇『坤輿万国全図』(原刊本)の九重天図 宮城県図書館所蔵
Figure of nine layers of heaven in the original edition of the *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* by Matteo Ricci, 1602, Miyagi Prefectural Library, Sendai
九重天の外側から2番目の第8重天の「四萬九千年作一」の文字間隔は他の部分に比べて狭いので、埋木による修正と判断される(第1表参照)。

を検討しておきたい。第一表に示したように、本邦模写本においては、国名を「拂郎機」とし、その西方沖合に「拂郎機乃回回誤稱本名波爾杜曷爾」という注記を書き入れている。これに対して現存明刊本では、国名を「波爾杜瓦爾」とし、沖合の注記はこれを版木の段階において抹消した跡がある(第3図参照)。

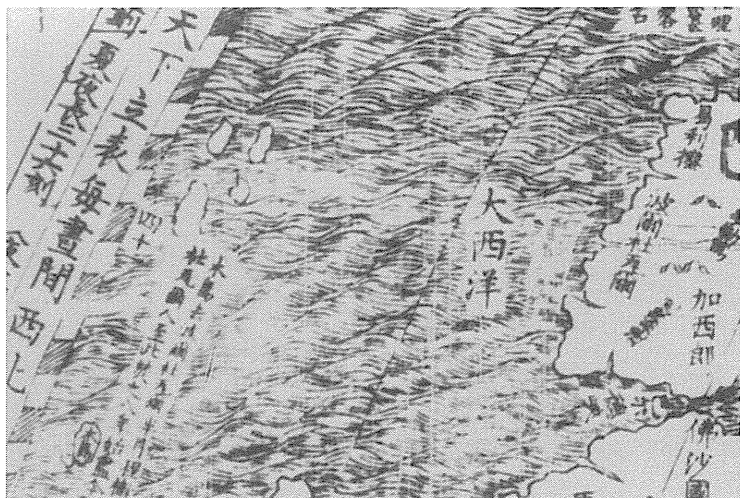
「拂郎機」は早く嘉靖十五年(一五三六)序刊の黄衷『海語』巻一の満刺加の項に「正徳間、拂郎機之舶来、瓦市、争利而鬩」云々と記載されている。マラッカに来たポルトガル人を指しての呼称で



第2図 利瑪竇『坤輿万国全図』（原刊本）の李之藻序文 ヴァチカン図書館所蔵

Li Chih-tso's preface of the original edition of the *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* by Matteo Ricci, 1602, *Bibliotheca Apostolica Vaticana*

初行の「唐賈南皮畫寸」、第22行の「異人異書世不易遭」が埋木による修正部分（第一表参照）



第3図 利瑪竇『坤輿万国全図』（原刊本）のポルトガル 宮城県図書館所蔵
Portugal as shown on the original edition of the *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* by Matteo Ricci, 1602, Miyagi Prefectural Library, Sendai

ある。しかし、「佛郎機」は元来イスラーム文化圏において漠然とヨーロッパ人を指して呼んだ Farangi の音訳であり、ポルトガルを指すとは限らない⁽⁵⁾。リッチもこのことは承知しており、最初は注記としてそのことを説明していたわけであるが、注記程度では十分と考え、国名表記そのものの変更に至っているのである。一方、彫版師は不要となった注記を全面的に削除し、そのあと埋木によって波模様に変更したのではなくて、もとの版木に適当に改変を加えて波模様に近づけたため、刷りを重ねるたびに隙間に詰めた木片が移動または失われて、注記の文字が部分的に浮かび上がるという結果を招いている。従って、文字が読めないものほど初刷りに近く、その反対の場合はかなり回を重ねたのちの刷りということになる。この点からすると、ヴァチカン図書館本および国立公文書館（旧内閣文庫）本は早い時期の刷りであり、宮城県図書館

本および京都大学附属図書館本はややのちの刷りである可能性はぬぐえない。

それはともかくとして、なぜわが国に改訂前の初版が到来していたのであろうか。マテオ・リッチはその回想記の中で、一六〇〇年（万曆二十八）の南京版世界図についてであるが「マカオや日本へも送った」と述べており、⁽⁶⁾また、一六〇八年三月八日発信の書翰において、

私たちがシナ語で書いたこれらの作品（『天主実義』その他）が日本で非常に役立っていると聞いて、私たちは深く心慰められました。シナ語は日本でも通じているからです。⁽⁷⁾

と書いているので、北京で刊行の『坤輿万国全図』も刷上があるのを待つようにして、在日イエズス会士に送ったにちがいない。この図におけるリッチの序文年紀は「万曆壬寅孟秋」すなわち万曆三十年（一六〇二）七月となっているので、その翌年か翌々年には日本に届いたのであろう。時期はともかく、初版が日本に届けられたことは、何よりも本邦模写本の内容が雄弁に物語っている。

さて、以上に指摘した改訂は、李之藻自身の判断によるものとリッチ当人の判断によるものとの二種に分れるが、その改訂時期が同時でなかったことが、東洋文庫所蔵清代模写本および共に図像追加の手書本である北平歴史博物館旧蔵、南京博物院所蔵の両本によって明らかとなる。節を改めて、その理由を明らかにしよう。

二 二次にわたる改訂および図像追加手書本の成立

先ず、東洋文庫所蔵の清代模写本についてみると、第二表に示すように、李之藻序文の初行および第二二行はそ



第4図 東洋文庫所蔵清代模写『坤輿万国全図』のポルトガル
 Portugal as shown on the ch'ing dynasty copy of the *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* by Matteo Ricci, owned by the TōYō Bunko library, Tokyo

れぞれ改訂されているものの、ポルトガルの国名表記および注記は、本邦模写本すなわち初版と同じい⁽⁸⁾（第4図参照）。第四幅におけるシナに関する記載「大清一統」「大清海」などは、模写に際して「明」を「清」に改めたに相違ないが、ポルトガルの国名および注記のみを初版の記載に戻すというようなことは到底あり得ない。従って、模写に用いた粉本そのものが、李之藻の序文のみが改訂されていた版であったとせざるを得ない。なお、「大明聲名」の「明」は模写人の不注意のはずである。いずれにせよ、リッチによる改訂が加えられる以前に、李之藻単独の改訂版が成立していたのであり、それはまた北京歴史博物館旧蔵および南京博物院所蔵の図像追加手書の『坤輿万国全図』の内容からもその存在が確認できる。なぜなら、第二表に示すように、これら両本においても、李之藻の序文は改訂を受けているにもかかわらず、ポルトガルは依然として「拂郎機」のままであるか

第三表 利瑪竇『坤輿万国全図』明代刊本の改訂順序

改訂箇所 版次	九重天図(第一幅)	李之藻序文(第三幅)		ポルトガル(第六幅)	判断資料
		初行	第二行		
初版(初刷)	二十八宿天七千年	元朱思本畫方分里	語不云乎在夷則進	拂郎機、拂郎機乃回誤 稱本名波爾杜島爾	江戸時代初期本邦模写本
第一次改訂版	同 右	唐賈南皮畫寸分里	異人異書世不易遵	同 右	東洋文庫清代模写本 北平歴史博物館旧蔵、南 京博物院所蔵圖像追加手 書本
第二次改訂版	二十八宿天四萬九千年	同 右	同 右	波爾杜瓦爾 (右の注記抹消のあとあり)	現存明刊本

らである。つまり、これら両本はリッチ改訂版以前の李之藻単独の改訂版を粉本としているのである。このように、改訂は二度にわたって行われているのであって、現存明刊本は第二次改訂版ということになる。対比が容易なように一覧表にしてみると、第三表のようになる。では、これらの改訂はいつなされたのであろうか。

この件ばかりでなく、圖像追加手書本の成立の解明にも役立ちそうなりッチの言明が彼の回想記にあるので、繁をいわず引用すると、次の通りである。

ある日、神父たちに何事か命じようとする国王から大至急の呼び出しがあった。マテオ神父とバントーハ(龐迪我)神父が数学の学院(欽天監)に属する宦官たちの部屋へ行ってみると、院長や他の者たちがひどく思索顔をしていた。というのも、国王が奥から使いを寄越して、六幅の図から成る「世界地図」を絹布に印刷した

ものを一二組欲しいと言ってきたからである。⁽⁹⁾（第五書第一章）

このあと、六幅の世界図（『坤輿万国全図』）の大きさおよび屏風仕立になっていたこと、「シナが小さい」と不満を洩らした文人たちがいたことなどを述べて、

北京では、この地図は二ヶ所で彫版が行われたが、いずれの版型も同じだった。すなわち、李之藻——彼は郷里へ帰るとき、版木も一緒に持ち帰ってしまった——によるものと、それを印刷して売出そうとする彫版師たちによるものである。事実、彫版師たちは非常に多くの地図を作って高い値段で売った。ところが、その年は北京に豪雨があり、彫版師たちは古い家に住んでいたため、夜のうちに家が倒壊し、二人とも死亡し、版木も壊れてしまった。⁽¹⁰⁾（第五書一七章）

という事実を明らかにしている。『坤輿万国全図』には正規の版木のほかに、彫版師たちが勝手に造ったもう一組の版木（以下工人模刻本と呼ぶ）⁽¹¹⁾があり、正規の版木は李之藻が帰郷の折に郷里に持帰ったというのである。彼の郷里は杭州であり、帰郷というのは年代的に見て福建学政も任命されて北京を発った万曆三十一年（一六〇三）七月のことを指しているはずである。⁽¹²⁾とすれば、李之藻による改訂は当然それ以前になされていたであろう。また、リッチによる改訂も李之藻の帰郷前であったことは、後述するように、工人模刻本の版木によったと判定されるウィーン国立図書館所蔵本に現存明刊本と同様埋木による改訂がなされているからである。要するに、李之藻ならびにリッチの指示による改訂が工人模刻本にも見られるということは、その指示が李之藻の帰郷以前つまり彼の北京滞在中であったことを意味する。しかも、その改訂が二度に及んでいる以上、李之藻による第一次の改訂は極めて早く万

曆三十年（一六〇二）七月の初版刊行の直後であつたと思われる。恐らく、初版は試し刷に近いものであつて、その印刷部数もわずかであつただろう。本邦模写本によつてのみ辛うじてその存在が知られるのも、このような事情を反映していると言わざるを得ない。引続いてのリッチの指示による改訂もまた李之藻の帰郷した万曆三十一年（一六〇三）七月以前のことであつてみれば、初版刊行から一年以内であつたわけであり、第一次と第二次の改訂時期は接近していたとして差支えないであらう。しかも、第一次改訂版も部数がわずかであつたであらうし、現存明刊本のいずれもが第二次改訂版であるというのは、李之藻およびその子孫が杭州において求めに応じては刷つた結果と見てよいであらう。

さて、先に引用したリッチ回想記のシナ皇帝から要望のあつた一二組の絹本世界図についての記述に話を戻すことにしよう。すでに触れたように、正規の版本は李之藻が郷里に持歸つたあとであり、彫版師が無断で造つた版本も豪雨による家屋倒壊によつて破損していたため、俄かには対応することができなかった。このときの豪雨は余程大規模であつたようで、『明史』卷二二にも、

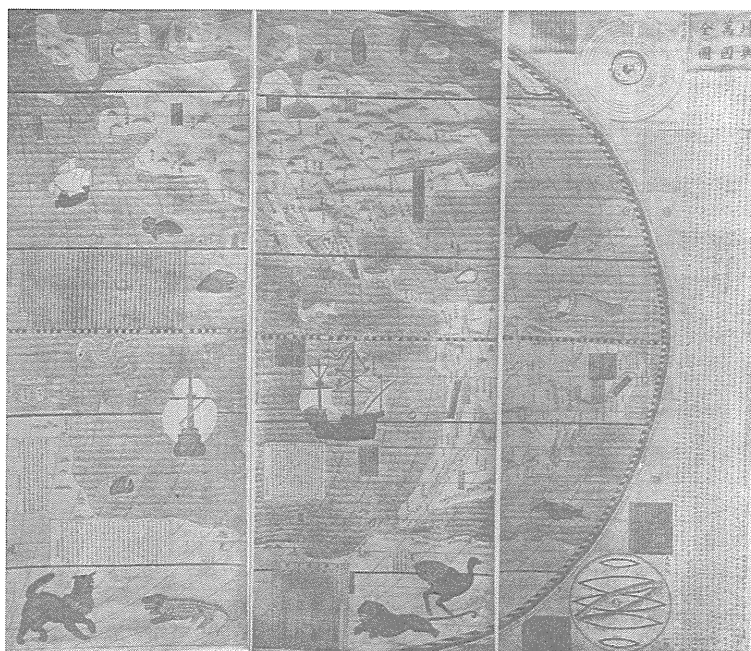
〔万曆〕三十二年秋七月庚戌、京師大雨、壞城垣。辛酉、振被水居民。

と記載されているほどである。⁽¹³⁾この年（一六〇四年）の北京の豪雨については、リッチ回想記の別のところにも記載があり、⁽¹⁴⁾一二組の絹本世界図の要望があつたのは、万曆三十二年（一六〇四）七月以後のはずである。では、リッチらはどのような処置を講じたのであらうか。リッチ回想記の前引の文章のあとの記述を要約すると次の如くである。版本が残っていた『兩儀玄覽図』（八幅）ではと申し出たところ、宦官たちは国王の要望する版型とは異なる

と言つて難色を示したので、新たにより良いものを一ヶ月のうちに彫版させようと提案したところ、今度は国王の側がそれほどまでにする必要はないと辞退し、既存の六幅の図に基づいて新たに版木を彫り、王宮内で必要なだけ刷つたのである。⁽¹⁵⁾しかし、これにはリッチの誤解と想像とがあるように思われる。第一点は皇帝が要望したのは絹本の世界図であり、たとい版木が残つていたとしても絹布に刷ることは至難の業であつたはずであるが、リッチらはそのことに理解がなく、絹本という要望を版刻によるものと早合点した嫌いがある。また、一二組という指定は刊本の数量としては半端であり、華麗な彩色の施された絹布の世界図であつたばこそではなかつただろうか。それを思わせるような記述がリッチ回想記にはあり、一二組の絹本世界図の要望があつたという前引の記事のあと、神父たちはその世界図（『坤輿万国全図』）の多くを贈物にしたので、宦官たちの誰がそれにさまざまな彩色を施して国王に献上したのか、わたしにはわからない。⁽¹⁶⁾（中略）恐らく、皇太子や他の親族の者たちに贈つて、それぞれに部屋に置かせるためかと思われる。（第五書第十七章）

と述べているからである。絹本という指示および一二組という限定からすると、屏風仕立を前提とした着色の世界図であることが最初から求められていたにちがいない。そのことが念頭にあつたので、リッチをしてこのような文章を書かせたのではないだろうか。

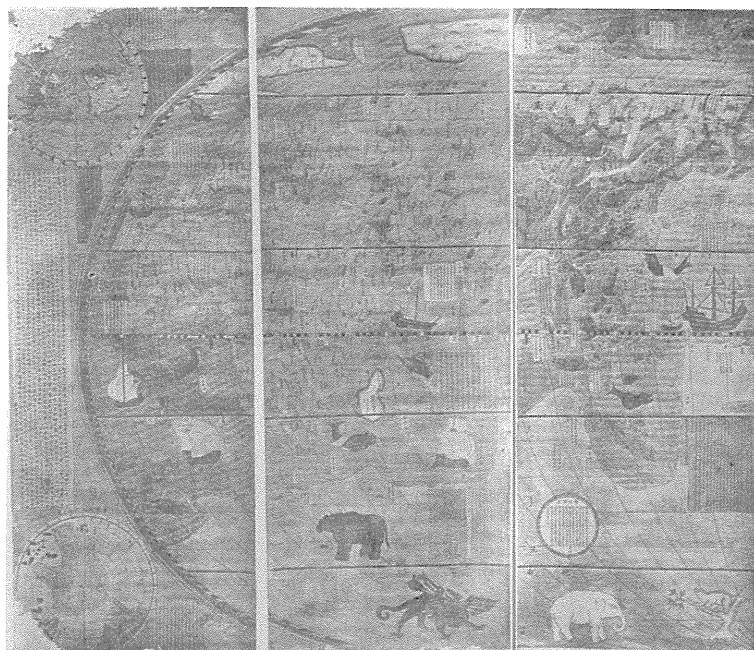
第二点は、わずか一二組のために皇帝が新たに版木を彫らせたとは考えられないことである。ましてや、必要とするのは絹本の世界図であり、リッチが「王宮内で必要なだけ刷らせた」と言っているのは「刷らせた」のではなくて「作らせた」の誤解であろう。もし仮に、このとき新たに版木が彫られたのであれば、それを用いた別の版の



(『河北第一博物院半月刊』45～47期〈民国22年〉より)
MS., formerly owned by Pëip'ing Museum of History

『坤輿万国全図』が残存していてもよいわけであるが、その片鱗すら痕跡をとどめない⁽¹⁷⁾。やや着彩の豊かな刊本『坤輿万国全図』としては、オーストリア国立図書館所蔵本が該当するが、清代に入ってからのもので、年代が合わない。

ところで、版木によるのではなく、手書の華麗なしかも絹本の『坤輿万国全図』は既述のように、かつて北平歴史博物館に所蔵されていたことがあり、その模写本と思われるものは南京博物院に所蔵されているので、万暦年間の一二組の絹本『坤輿万国全図』との関係の有無を検討しておきたい。これら手書本の特徴は、刊本の場合とは異なっており、珍奇な鳥獣魚類の絵を書き加えていることであり、部屋の調度品と



第5図 北平歴史博物館旧蔵図像追加手書『坤輿万国全図』
Matteo Ricci's *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* with many illustrations,

して飾るにふさわしい内容になっているからである（第5図参照）。同種の図はかつて北京在住のイタリア人ニコラス（G. Niccolao）氏も所蔵していたことが、洪煥蓮氏やデリア（D. Elia, P. M.）氏によって報告されているが、⁽²⁰⁾その存否は明らかでない。また、その第三幅のみであるが、同じ内容のものが米国マサチューセッツ州シャロン（Sharon）の The Kendall Whaling Museum に所蔵されている。⁽²¹⁾

これら図像追加手書本が粉本とした『坤輿万国全図』が李之藻序文の初行と第二二行を改訂したのみの第一次改訂版であったことは既述の通りであるが（第二、第三表参照）、このことは、第二次改訂版である現存明刊本が流布したのちに描かれたもの



図像追加手書『坤輿万国全図』

MS., owned by Seoul University Museum

でないことを意味する。すなわち、図像追加手書本の成立はかなり早い時期であったことになるであろう。シナ皇帝が一二組の絹本世界図を要望したという年代すなわち万暦三十二年（一六〇四）の後半にまで遡らせても何ら内容的には矛盾しないのである。ましてや、北平歴史博物館本は絹本であり、皇帝の要望に合致しているにおいておやである。そのときの絹本世界図がリッチらの手を離れて宮廷内で詠えられたものであったことを、これらは如実に物語っている。なぜならば、そこに描かれている各種の画像わけても西洋帆船に写実性が乏しく、西洋の遠近画法に不慣れた宮廷画家の手になるものであることが明白だからである。西洋帆船をはじめとする珍奇な鳥獣魚類の絵は、勿論西洋から渡来のものであり、リッチらはその原画を提供したに過ぎないであろう。地図の中に帆船・鳥獣魚類を描くことは、当時のヨーロッパでは一般的なことであり、そうした画像の豊富な地図帳を提供したのかも知れない。ともかく、図像追加手書『坤輿万国全図』は西



第6図 ソウル大学校博物館所蔵

Matteo Ricci's *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* with many illustrations,

洋人画家の手になるものではなく、リッチが「宮廷内で必要なだけ刷（？）らせた」と言っている宮廷画家の作品であることはその画風からして明白である。北平歴史博物館本こそは一二組の絹本世界図に含まれていた一本と断定して差支えあるまい。

ところで、第二表に示したように、画像追加手書『坤輿万国全図』に右に挙げた以外に朝鮮においても描かれているが、それに用いられた粉本の『坤輿万国全図』は同じではなく、現存明刊本すなわち第二次改訂版なのである。ということは、北平歴史博物館本系統の図の模写ではなく、別の機会に描かれたものであることを意味している。

朝鮮における画像追加手書本として、第二表にはソウル大学校博物館本と南蛮文化館（大阪市）本とを挙げたが、一九五〇年の戦火によって失われるまでは京畿道の奉先寺にも所蔵されており、これがソウル大学校博物館本の正本とされている⁽²²⁾。その大型写真印画はソウル大学校奎章閣に保存されて

いるが、文字を読むのには必ずしも十分の大きさではなく、また南蛮文化館本は模写本であり、⁽²³⁾記事の文字に誤謬もあるので、以下ソウル大学校博物館本を利用する(第6図参照)。

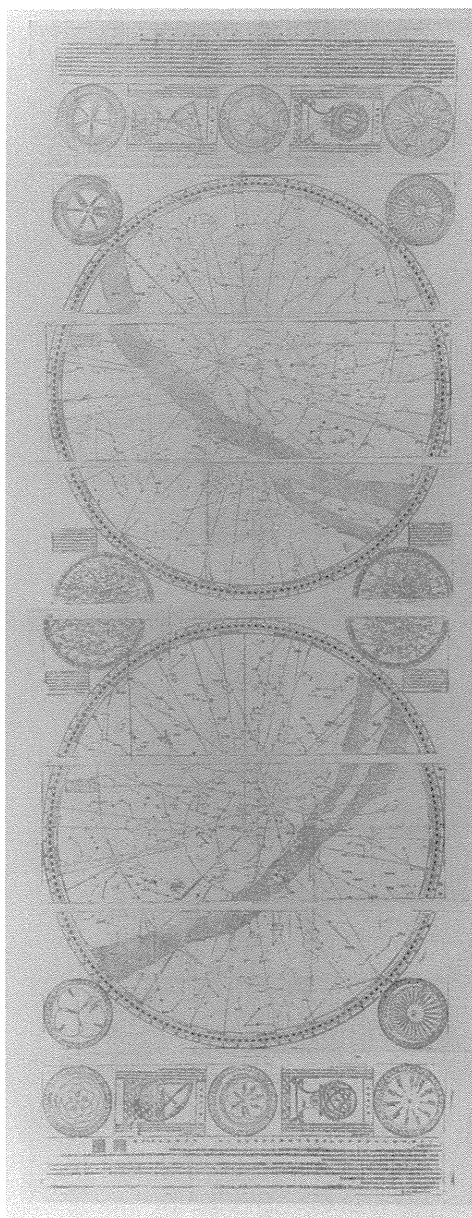
八曲から成るソウル大学校博物館本(一七二×五三・一 cm)の第八扇に「西洋乾象坤輿圖二屏総序」と題する崔錫鼎の文章があり、年次は「戊子秋八月」となっている。「戊子」が李朝肅宗三十四年(二七〇八)の「戊子」であることは、文中に「上之三十四年春」云々とあることによって明らかであり、天文図世界図屏風一対成立の経緯を次の如く説明する。

皇明崇禎初年、西洋人湯若望、作「乾象坤輿圖各八帖」、為「屏子印本」、伝「於東方」。上之三十四年春、書雲監進「

乾象図屏子」。上命「繼模「坤輿図」以進」。(句読点・返り点は筆者)

崇禎初年(元年は一六二八)湯若望ことヨハン・アダム・シャル・フォン・ベル(Johann Adam Schall von Bell)の作った天文(星)図・世界図各八幅の刊本のうち、天文図を肅宗三十四年(一七〇八)に屏風として献上したところ、世界図をも模写して献上するよう下命があったというのである。一六二八年頃の作品を八〇年も経た後において献上するというのも理解に苦しむところであるが、この崔錫鼎の序文をもつ世界図には湯若望の名はなく、紛れもない利瑪竇の『坤輿万国全図』なのである。一体これはどうしたことなのであろうか。まず、湯若望の天文図・世界図に焦点を絞ってみよう。

現存する湯若望の天文図は、『赤道南北両総星図』と題される刊本で、崔錫鼎の言うように八幅から成っている(第7図参照)。各幅の大きさは一六七×五二・八 cmと報告されており、北京の故宮博物院明清檔案部所蔵本には彩



第7図 湯若望『赤道南北両総星図』崇禎7年(1634)刊 ロビンスン文庫所蔵
Ch'ih-lao nan-p'ei liang tsung-hsing t'u (Two General Maps of the Stars North and South of the Equator) by J. A. Schall von Bell, 1634, Library of Philip Robinson

色が施されている。⁽²⁴⁾ 刊記はなく、徐光啓の叙にもまた湯若望の図説にも年紀はないが、前者の文中には、崇禎戊辰年「云々、後者にも「崇禎元年戊辰」云々とあるので、崔錫鼎の序文中の「噫乾象圖、有崇禎戊辰字。」はこのことを言っているわけであり、彼のいう「乾象圖」がこの『赤道南北両総星図』であることは疑いない。ちなみに、この図は『崇禎曆書』の成果の一環として崇禎七年（一六三四）七月に献上されたものであることが、『西洋新法曆書』の「治曆緣起」の記事によって知られる。⁽²⁵⁾

では、崇禎七年（一六三四）刊のこの湯若望の『赤道南北両総星図』が朝鮮にもたらされたのはいつだったのでしょうか。最も可能性の高いのは、一六三六年（崇禎九）の清国軍の朝鮮攻略の際、人質として連れ去られた朝鮮王子三名が許されて帰国した一六四五年（崇禎十八、順治二）である。なぜなら、王子らは北京において湯若望と親しく交り、帰国に際してその著作各種および地球儀を贈られているからである。⁽²⁶⁾ もし、このときでなかったとすれば、その翌年（一六四六年〈順治三〉）北京に赴いた天文学者の金増^{きんいけ}が、湯若望には会えなかったものの、その著書恐らくは完成したばかりの『西洋新法曆書』（二六四五年刊）を購入して持帰っている⁽²⁷⁾ので、その一環でもある『赤道南北両総星図』が含まれていた可能性は大いにある。いずれにしても、湯若望のこの図が一七〇八年（肅宗三十四）に献上されているのであるから、朝鮮への伝来はかなりおそかったものと思われる。王子らの帰国時あるいは金増の帰国時であったと仮定しても、一七〇八年からすれば六〇年を超える年代差があり、実際はそれより遙かのちのことであったのかも知れない。その時期はともかくとして、奉先寺旧蔵本やソウル大学校博物館本の片双は、湯若望の『赤道南北両総星図』の刊本そのものであったか、その模写であったにちがいないが、今は失われていて

確かめようがない。一方、天文図を伴う南蛮文化館本においては湯若望の図ではなく、雍正元年（一七二三）刊の戴進賢（Ignatius Kogler）の『黃道南北両総星図』⁽²⁸⁾と朝鮮古来の『天象列次分野図』⁽²⁹⁾とが描かれている。しかも、その第五扇下部の記事には「乾隆九年西人戴進賢」云々という語句すら見える。つまり、南蛮文化館本の成立は、乾隆九年（一七四四）を遡らないのである。崔錫鼎の献上した屏風天文図・世界図一雙のうちの天文図とは無縁のものであり、肅宗三十四年（一七〇八）当時の状況を考える材料とはなり得ない。このように、天文図については模写本すらも現存しない状況ではあるものの、八幅から成ると崔錫鼎が言う湯若望の「乾象図」すなわち『赤道南北両総星図』が現存しているので、事実関係に疑問の余地はない。では、彼が言う同じく八幅構成の湯若望の「坤輿図」と奉先寺本やソウル大学校博物館本に描かれている利瑪竇の『坤輿万国全図』とはどのような関係にあるのであろうか。湯若望の世界図作製に目を向けてみよう。

湯若望の世界図として知られているのは、その著『渾天儀説』（崇禎九年（一六三六）刊）に所載の「地球十二長円形図」であり、地球儀の球面に貼付する一二紙片の断裂多円錐図法、俗に言う船底型の世界図である。⁽³⁰⁾天地両球儀の製作法を述べる箇所、同じく断裂多円錐図法の天球図と共に掲げられており、主眼はあくまでも地球儀製作の一環としてである。従って、図形も地名もそれほど詳細ではない。図は計三丁にまたがっているとはいえ、書籍収載の図であってみれば、おのずから限界があるというものである。リッチの世界図の特色の一つであった『巨大な半島としてのニューギニア（新入匿）』は、この図では南方大陸（墨瓦臘泥加）とは切離されて島嶼（「新為匿」）の扱いになっているほか、地名はどちらかと言えば、リッチ図よりは艾儒略（Aleni, G.）『職方外紀』（天啓三年（一六一二

三〇刊）所載図の系統である。いずれにしても、この図が奉先寺本やソウル大学校博物館本の世界図の祖図であらうはずはない。投影法は勿論のこと、海陸の図形や地名がちがいが過ぎる。では、『渾天儀説』所載図以外に湯若望は世界図を作ったことはなかったのであろうか。『西洋新法曆書』（順治二年（一六四五）刊）の「湯若望奏疏」を見ても、順治元年（一六四四）七月に、天球儀、日時計、望遠鏡などと共に「輿地屏図六幅」を皇帝に献上している。^{（31）}「屏図」とあるからには屏風仕立であるが、六曲である故、崔錫鼎の言うところとは合わない。順治元年（一六四四）と言えば、既述のように、北京において湯若望と親しくしていた朝鮮王子三名が帰国する前年であり、献上された屏風世界図と同じ内容のものを湯若望から与えられる可能性がないではない。そうだとすると、その図の正式表題は不明ながら、崔錫鼎はその図と既存の図象追加手書『坤輿万国全図』とを混同したことも考えられる。しかし、八幅と明記しているからには、図象追加の『坤輿万国全図』がシナからもたらされたとき、すでに八幅（または八曲屏風）だったのかも知れない。六幅を八幅と誤認する確率は小さいと思われるからである。このことは、第二表において指摘したように粉本として用いられた刊本『坤輿万国全図』が、北平歴史博物館本や南京博物院本（以下これらを甲類と呼ぶ）とちがって、第二次改訂版すなわち現存明刊本であることと関係がありそうにも思える。すなわち、朝鮮にもたらされた図象追加手書本（以下乙類と呼ぶ）は、第一次改訂版を祖図とした甲類とは別の機会に描かれたことが明白であり、湯若望の『赤道南北両緯星図』と一対の調度品とするために、『坤輿万国全図』をそれに合せて八幅（八曲屏風）に変更したかもしれないからである。「乾象図」「坤輿図」共に八幅であったとする崔錫鼎の言明に誤りがないとすればこのように理解するほかない。ただし、その「坤輿図」が湯若望の作でなかつ

ただことは、現存する乙類の内容からして明らかである。乙類については、本稿の主題からすると、やや付随的な事項であり、これほどまでの議論は必要でなかったかも知れないが、従来、十分な検討がなされていなかったことを考慮したからにほかならない。

ところで、現存する刊本『坤輿万国全図』としては、また、すでに触れたようにオーストリア国立図書館所蔵本およびロンドン王立地理学協会所蔵本がある。次節においてこれら二本を祖上にのぼすこととしよう。

三 オーストリア国立図書館本とロンドン王立地理学協会本

先ず、オーストリア国立図書館所蔵本（以下ウィーン本と略称）⁽³²⁾について考察することとしよう。この図については、すでに川村博忠氏および青木千枝子氏の論考があるので、⁽³³⁾先に川村氏によって明らかにされた事柄を紹介し、そのあと青木氏の見解をうかがうこととする。川村氏の調査研究によって明らかになった事柄を整理してみると、次の如くである。

(一) この図にはラテン語による記載をもつ付箋が添えられていて、それには「一六七二年に在華イエズス会士ブルスペロ・イントルチェッタ (Prospero Intorcetta) によつて皇帝陛下に献上された地図である」と記載されており、図がウィーンにある理由が判明する。一六七二年はイントルチェッタ（殷鐸澤）がローマに一時帰国していた時期であり、シナからの帰国に際して持帰り、ときの神聖ローマ皇帝レオポルト (Leopold) 一世に献上したものである。

(二) 図中のシナの部分に大きく記載されている「大清一統」の四文字のうち「清」字のみは墨書であり、一方、東シナ海に「大明海」、南シナ海に「大明聲名」云々と刻されていることからして、明刊本によるものであることは明らかであつて、清代に入つて新たに彫版されたものではない。この点は、ロンドン王立地理学協会所蔵本（以下ロンドン本と略称）の「大清海」「中国聲名」とは異なっている。また、第二幅下部の「総論横度里分」の数値を現存明刊本のそれと比較してみると、四ヶ所相違している。ところが、ウィーン本の数値はロンドン本のそれと一致しており、この部分は新たに彫版された版本に基づくことを物語っている。つまり、ウィーン本の或る部分は、現存明刊本の版本とは別の版本によつていのである。

(三) 右のような事実から、ウィーン本は、リッチが回想記の中で「印刷者がひそかに同じ版型のものをもうひと組彫版してしまった」という「工人模刻版」である可能性も推測されるが、発注者に内密で模刻する場合、正規の版と区別がつかないようにするのが自然であり、豪雨によつて破損したという工人模刻版を補修した宮廷版であるかも知れない。いずれにしても、ロンドン本はウィーン本に基づく改刻版である。

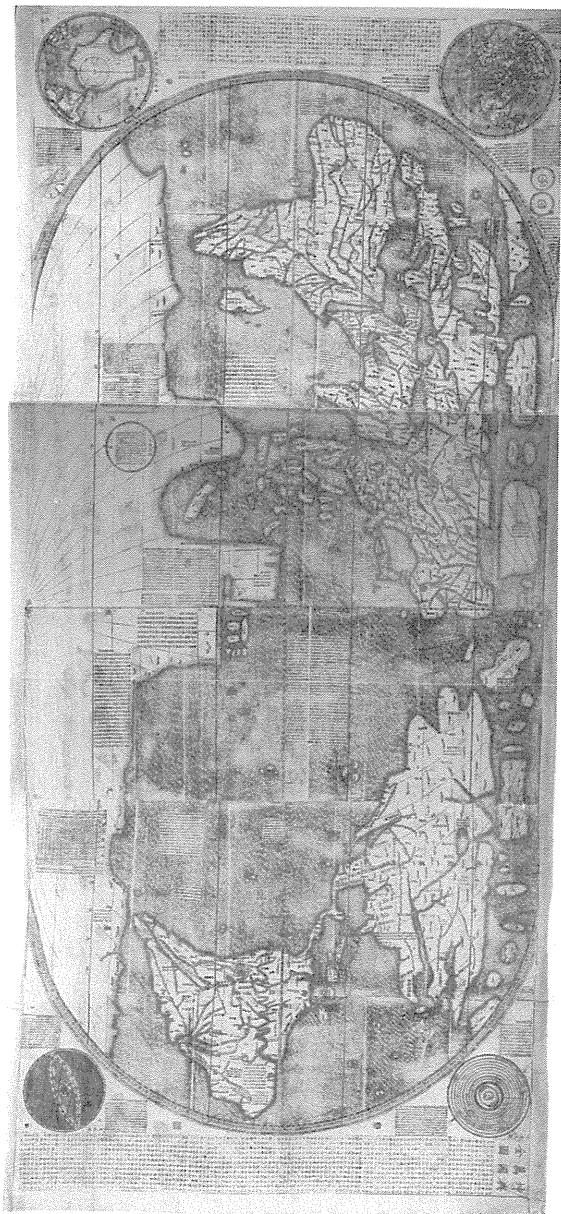
青木氏の場合は、主として版面についての観察結果の報告であり、現存明刊本との相違を事細かに述べている。結論としては、工人模刻版の修復版の清代改訂第一版であらうとしている。工人模刻本そのものとしなひのは、正規の版すなわち現存明刊本と比べて余りにも多くの相違があることをもつて根拠としている。また、宮廷版でない証拠としては、たとい政權交代（明朝から清朝へ）があつても、版本は宮廷内に保管されたままで、清代に入つてそれを改刻して刷るというようなことは不可能に近いとの判断からである。

以上の両氏の見解をまとめてみると、川村氏が宮廷版という判断に傾いているのに対して、青木氏は工人模刻本修復版の清代改訂第一版と考えている。では、いずれが真実を突きとめているのであろうか。

このことを考える上において、重要な手掛りとなるのは青木氏が指摘された現存明刊本との相違点である。そもそも、一幅の大きさが約一七〇×約六〇cmという巨大な図の各幅における版木構成は複雑であり、現存明刊本の場合には第8図に示したような構成と判断される。これをウーン本のそれと比較してみると、全く異なるところがない（第9図参照）。なお、青木氏は図解しておられないので、確かなことは言えないが、第三幅の版木構成を四面とされるのは、筆者判定の④と⑤を一続きのものと判断された結果のようである。現存明刊本との主要な相違点は、青木氏によると次の通りである。第一幅から見行くと、第二版木による部分の細字の記事「四行論略曰天生創作」の「生」字（現存明刊本では「主」、以下断りなき限り括弧内は現存明刊本の状況）第二幅第五版木部分の昼夜時間の「昼長一百六七日」の「七」（十）、「総論横度里分」説明文第一行の「別有咸分減秒」の「咸」（減）、および川村氏指摘済みの数値の相違、第三幅第一版木部分の「狗国」字の欠如、同幅第五版木部分の「墨瓦蠟泥加」の「蠟」字墨書、第四幅第三版木部分の「大清一統」の「清」字墨書、（川村論文〈注32〉第二図参照）、同幅第五版木部分の「看北極法」最終行「若干度」の「于」（干）、「地南極界」「南極」の墨書、第五幅第一版木部分の緯度「九十」字の欠如および「波羅泥亜」の「波」字の下方への位置のずれ（川村論文〈注32〉第四図参照）、同幅第二版木部分のナイル川三角洲の形状、第六幅第一版木部分の表装注意書第一行の「尺十」の「十」（寸、川村論文〈注32〉第三図参照）、北半球図の「默大□刺」（默大入刺）「馬尔馬利尔」の最後の「尔」（加）、「亜刺漫的亜」の最初の「亜」（革）、「亜毘

VI	①	V	①	①	①	①	I
	△						
							*
	②		②		②	②	②
			*	③	②	*	*
	③						③
④	*	③	④	③	③	③	④
⑤	*	④	⑤	④	④	④	⑤
⑥	△		*	⑤	*	⑤	⑥

第8図 利瑪竇『坤輿万国全図』(原刊本)の版木構成
Construction of blocks of the *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* by Matteo Ricci, 1602
△印はウイーン本における新調版木、*印はウイーン本において欠損または埋木のある版木



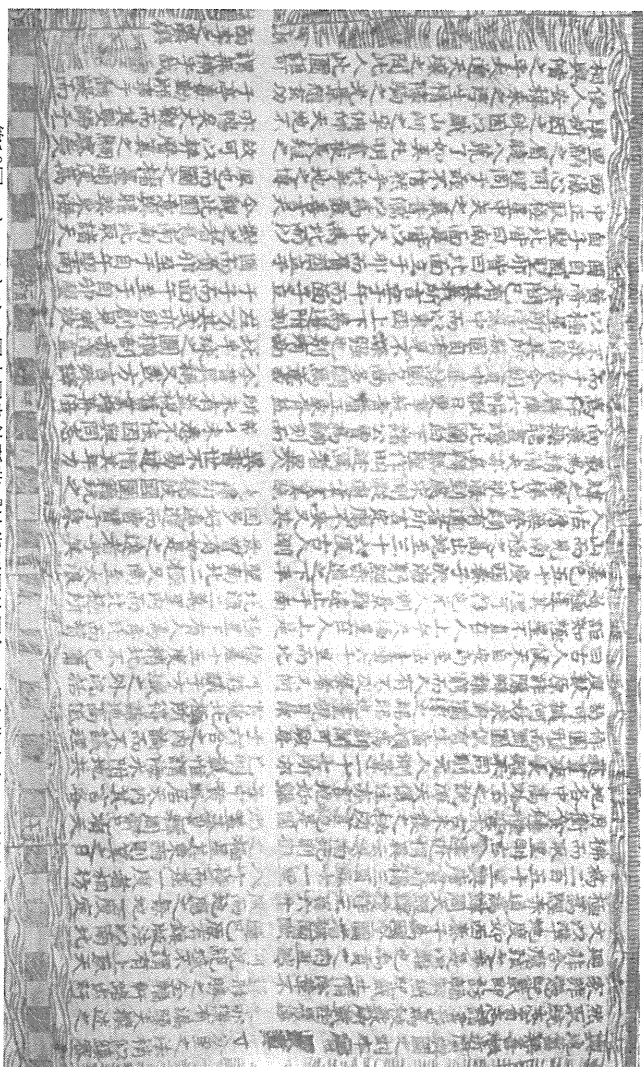
第9図 オーストリア国立図書館所蔵『坤輿万国全図』
Matteo Ricci's *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* owned by Österreichische Nationalbibliothek

利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版 海野

第八十七卷 一二七

心域」の「心」(心、以上アフリカ地名、川村論文〔注32〕第三圖参照)「大清一統」の「清」(明)、「于闐」字の欠如、同幅第三版本部分の「聖多默島」の「聖」(仙)、同幅第四版本部分の「聖勞冷祖浜」および「聖衣力拿島」の「聖」(仙)、同幅第五版本部分のイエズス会紋章の形状、同幅第六版本部分の二十四氣説明文第二行の「為地体外」の「体」(鉢)および第七行の「十字処為宮」の「宮」(心)である。

これらの相違が生じた原因について青木氏は、(一)欠損版本使用によるもの、(二)全面復刻版本使用によるもの、(三)部分復刻版本使用によるもの、(四)埋木によるもの、(五)補筆によるものの五種を想定されているが、版本自体としては、新調されたものと破損を蒙った既存のものとの二種に大別できるであろう。この点からすると、第8図に示したように、新調のものは第二幅の第五版本、第六幅第一版本、同幅第六版本の三面であり、埋木の有無は別にして、かつて破損を蒙ったことのある版本は一〇面にも及んでいる。新調と判断される根拠を挙げておくと、第二幅第五版本の場合、川村氏指摘のように「総論横度里分」の数値が四ヶ所にわたって現存明刊本と異なっているからである。第六幅第一版本においては、青木氏指摘のようにアフリカ地名およびシナ地名に誤刻または欠落があることによる。⁽³⁴⁾同幅第六版本の場合も、青木氏指摘の如き文字などの誤刻があるからである。要するに、これら三面に該当する既存の版本は、その版面の破損の程度が著しく、使いものにならなかったことを意味している。全面的にしろ部分的にしろ、いくつかの版本にこのような事態が生じたとすれば、それは、工人模刻本の場合以外には考えられないことであり、ウィーン本こそまさしくその工人模刻本なのである。なぜならば、破損を蒙らなかった第三幅第三版本の李之藻序文第二〇行の第二版本の「其」に続く字が俗字の「国」となっており、現存明刊本の「國」とは




第10図 オーストリア国立図書館所蔵「坤輿万国地图」の李之藻序文 川村博忠氏撮影
 Li Chih-tso's preface in the Österreichische Nationalbibliothek version of the *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* by Matteo Ricci
 初行の挿木による修正は「唐賈南皮畫寸」の「ず」 第22行の「異人異書世不易遺」は挿木による修正（共に第一表参照）。
 第20行中央やや下寄りに俗字の「国」字（正規版では「國」）が使われている。

字体が異なるからである（第10図参照）。埋木による改刻部分はこの序文の初行および第二二行にも認められるが、「国」字はその墨付きの具合からして、明らかに彫版当初のままである。わずか一字ではあるが、現存明刊本の版木とは別の版木によっていることを示す有力な証拠である。恐らく、彫版師たちが模刻本をつくる際、字画の多い「國」字を避けて手間を省いた結果であろう。このような例は、新調版木以外の版木の部分について、現存明刊本と丹念に比較すれば、発見の可能性なきにしもあらずであるが、ウィーン本全幅の文字の読めるような写真印画を持たせていない現段階ではあきらめざるを得ない。

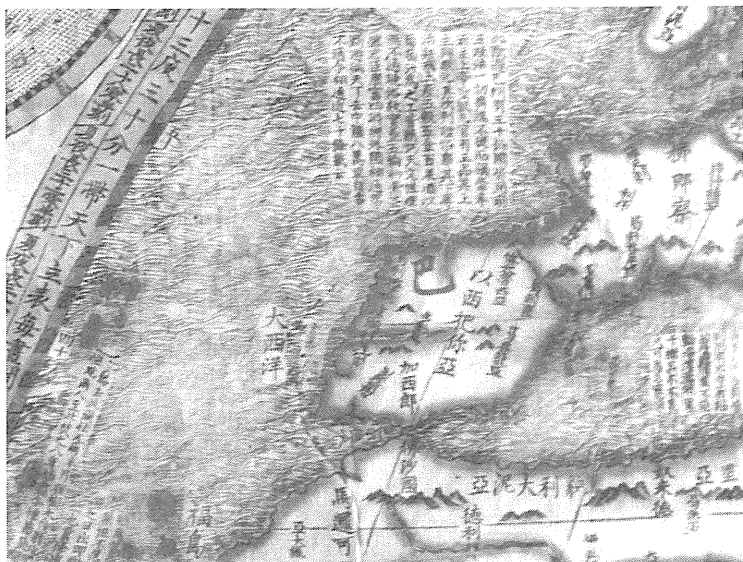
李之藻序文の初行および第二二行における語句の改訂に触れたついでに、現存明刊本におけるその他の改訂部分

第四表 工人模刻本の修復版二種（ウィーン本とロンドン本、傍点は筆者）

所 蔵	九重天図（第一幅）	李之藻序文（第三幅）		シナ一帯（第四幅）	ポルトガル（第六幅）	備 考
		初 行	第二二行			
オーストリア国立 図書館	二十八宿天四萬 九千年	 一寸分	異人異書世不易 遺 _(マ)	大清一統、大明 海、大明聲名文 物之盛	波爾杜瓦爾（注 記の抹消不徹底）	「清」字の改訂 は墨書による
ロンドン王立地理 学協会	（判読不能）	唐賈南皮□□分 里	同 右	大清一統、大清 海、中國聲名文 物之盛	同 右	図題を誤って 「城輿萬國全圖」 とする

が、ウィーン本ではどのようになっていたのか、一瞥しておこう（第四表参照）。「九重天図」（第一幅）の二十八宿の年数も現存明刊本と同じく「四萬九千年」に改められており、ポルトガルの国名表記も改訂後の「波爾杜瓦爾」となっていて、沖合の注記も抹消されている（第11図参照）。ただし、その抹消の仕方は現存明刊本の場合とはいくらか異なっている。いずれにせよ、現存明刊本と同様の改訂がすでになされているということは、これら工人模刻本における改訂時期が、正規の版木を李之藻が郷里杭州に持ち去る以前であったことの証しとなる。

それはともかくとして、ウィーン本において、現存明刊本の改訂箇所以外に埋木や補筆が見られる以上、それは家屋倒壊によって破損した版木を修復したものであり、言うならば、修復後の工人模刻本である。では、その修復はいつのことだったのだろうか。青木氏は、すでにたびたび言うように工人模刻本修復版の清代改訂第一版と受止めているが、その主な根拠は、川村氏が墨書としたシナ本土に記載の「大清一統」の「清」ならびに第六幅上部の北半球図の「大清一統」の「清」を共に埋木によるものと判断したところにあるようである。ロンドン本におけるそれらの字形・字配りがウィーン本と一致するとも言っており、埋木という判断に傾いている。しかし、筆者の見たところ、両者の「清」字は共に墨書であり、清代における補修版とするには無理がある。ただし、「明」という文字を抹消して「清」字を書入れたのでないことは、紙面にその痕跡がなく、版木の段階において「明」字が削除されていたか、または紙面に写らないような措置（紙を置く）がとられていたものと思われる。つまり、刷上がった段階ではその文字の部分は空白であったがため、埋木と見紛うばかりの効果を納めたものにちがいない。ロンドン本との比較を青木氏は筆者が提供した大型印画の電子複写によって行っているわけであるが、後述するように、



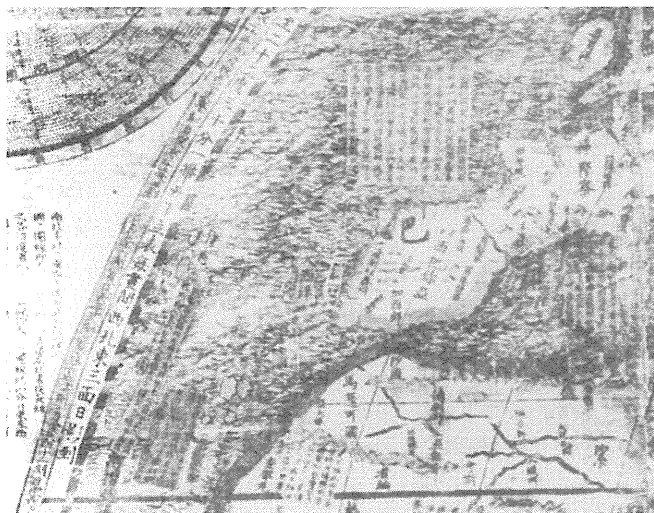
第11図 オーストリア国立図書館所蔵『坤輿万国全図』のポルトガル 川村博忠氏撮影

Portugal as shown on the Österreichische Nationalbibliothek version of the *K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u* by Matteo Ricci

現物ですら紙面の磨耗は甚だしく、しかも観察の困難な場所に固定されているので、図中の文字が刷りによるものか、墨書によるものかの判定には慎重を要する。従って、ロンドン本に關する青木氏の判断には信憑性が乏しいと言わざるを得ない。更に言えることは、修復版を清代に入つてさらに改訂しなければならぬほど需要があつたとは思えないということである。ウィーン本やロンドン本が清代になつて刷られたことは確かであるが、版本そのものは、明代につくられた補修版であつたはずであり、そして、その補修版の製作にはイエズス会士が関与した形跡がある。それは第六幅の第三、第四版本において、サントメ (S. Thome) 島、サンロレンソ海岸 (Coata de S. Lourenço)、『セントヘレナ (S. Helena) 島それぞれの漢字表記が、既述の

ように現存明刊本とは異なり、その語頭に「聖」字が用いられているということである。⁽³⁵⁾ 現存明刊本において語頭に用いられている「仙」は言うまでもなく音訳であり、「聖」は意識なので、原語の意味を知っている者のみが可能なことである。単なる市井の彫版師の想像だに及ばないことが行われている以上、破損した版木の修復に際しては、必ずやイエズス会士の関与があつたとせざるを得ない。ちなみに、天啓三年（一六三三）刊の艾儒略の『職方外紀』所載利未亜図では「聖多默島」「聖依勒納島」「聖老楞佐島」（マダガスカル島）と表記されているので、想像を逞しくすれば、艾儒略あたりがその張本人であり、時期は天啓三年（一六三三）前後であつたのであるまいか。そうだとすれば、まだ明朝の時代であり、補修は明代においてなされたと考える筆者の見解とも矛盾しない。ウィーン本やロンドン本の例からして明らかのように、清代に入ってもなお刷られているほどであるから、明代においては尚更のこと、『坤輿万国全図』への需要は高かつたはずであり、破損した工人模刻本の版木修復を彫版師に促したのはイエズス会士であつたにちがいない。いずれにせよ、工人模刻本そのものが現存しない今日、ウィーン本はその内容をうかがわせてくれる貴重な存在である。では、ロンドン本はどのようなことをわれわれに知らせてくれるであろうか。

ロンドン本については、早く一九一八―一九一九年にジャイルズ（Giles, L.）氏が現存明刊本との比較から、それが清代になってからの版であることを明らかにした。⁽³⁶⁾ すなわち、シナ本土には大きく「大清一統」、東シナ海には「大清海」との記載があり、南シナ海の注記は「中國聲名」云々であることのほか、第二幅下部の「総論横度里分」における数値のうち四ヶ所が現存明刊本と異なることを指摘されたのであつた。当時はウィーン本の存在が知



第12図 ロンドン王立地理学協会所蔵『^(ママ)城輿万国全図』のポルトガル
 Portugal as shown on the Royal Geographical Society version of the
K'un-yü wan-kuo ch'üan-t'u by Matteo Ricci
 ポルトガル（波爾杜瓦爾）の西方沖合に、改訂以前の注記であった「拂郎機
 乃回回誤稱本名波爾杜曷尔」が削除不徹底によってかすかに残っている（第
 一表参照）。

られておらず、清代に入つての彫版と判断され
 たのであったが、ウィーン本の内容が明かるみ
 に出た以上、それは果たして清代における全面
 的な改訂版なのか、再検討を要するところであ
 る。

すでに川村氏が明らかにされたように、ロン
 ドン本の「総論横度里分」の四ヶ所の数値は、
 ウィーン本と同じであり、少なくともこの部分
 の版木は同一であったと見てよい。ところで、
 先に工人模刻本の特色として李之藻序文第二〇
 行の「国」字使用を挙げたが、ロンドン本にお
 いても同じく「国」字が用いられており、他の
 版木もまたウィーン本と同様、補修後の工人模
 刻本の版木を使用している可能性は高い。李之
 藻序文の初行および第二二行における改訂が埋
 木であるのは勿論のこと、ポルトガル沖合の注

記抹消の跡が歴然としている以上（第12図参照）、清代に入ってから新たな版刻でないことは明白である。

ロンドン本の調査は、一九八七年に川村氏と共に行ったのであるが、現物はひろげたまま大部屋の壁に垂直に固定されていて、しかも風化を防ぐためか、表面には目を近づけてはじめて識別できる程度の極めて細い糸で編んだ目の荒い布が一面に貼付されており、その前面はガラス板である。従って、観察には不向きな状態と言わざるを得ない。しかも、当時はまだ青木氏の論考（註33参照）も発表されておらず、観察すべき箇所が未確定であったこともあり、大型の写真印画（二三×四八・五cm）の恵予を受けたのが唯一の成果と言える程度であった。従って、「大清一統」「大清海」、北半球図の「大清一統」の「清」字および「中國聲名」云々の「中國」が、刷りによるものかそれとも墨書なのかも確認するに至らなかった。しかし、サントメ島は「聖多默島」と表記されており、第三幅第一版木部分に「狗國」の文字がないというこれらの点において、ウィーン本と一致するからには、「清」「中國」の文字は墨書と判断してよいのではあるまいか。また、表題の「城輿萬國全圖」の「城」も刷りによるものとは到底考えられない。恐らく、この部分は破損していて、うっすらと土偏だけが残っているという状態だったので、「坤輿」という熟語を知らない無学の人物が意味も考えず「成」の字をその横に書き加えたに過ぎないことは言わずとも知れている。「成」の字形に稚拙なところがあるのも傍証になるであろう。要するに、ロンドン本は、ウィーン本と同じ版木によって刷られたものと断定して誤りはないであろう。ただし、もしも「大清海」の「清」、「中國聲名」云々の「中國」が埋木によるものであれば、ウィーン本とは異なるわけであるから、ウィーン本が刷られた後に版木に手を加えたことになる。その場合には、青木氏の言うように工人模刻本修復第二版と呼ぶのが妥当であろう。

う。しかしまた、一方では鮎澤信太郎氏が指摘されたように、第一幅の利瑪竇の地図総説第六行には「大明海」とあり、既存の版木に埋木しないまま刷られているという事実がある。これが単なる不注意によるものでないとするれば、「清」字や「中國」の場合のみ埋木であったとは考えにくくなる。いずれにしても、今後のより精密な検討が待たれる。

結 び

議論がやや多岐にわたったので、本稿において解明に至った事柄を整理してここに示し、結びとしたい。

「万曆壬寅孟秋」（万曆三十年七月）の刊記をもつ利瑪竇の『坤輿万国全図』は、刊年を変更しないまま、二度にわたって改訂版が刊行されている。初版本は現存しないが、江戸時代にわが国で模写された『坤輿万国全図』によって、その内容が知られる。第三表に示したように、第一幅の「九重天図」の二十八宿天、第三幅の李之藻序文の初行および第二二行、第六幅のポルトガル国名の表記が、現存明刊本とは異なっているのである。現存明刊本は第二次改訂版であり、第一次改訂版があったことは、東洋文庫所蔵清代模写本および北平歴史博物館旧蔵本その他の図像追加手書『坤輿万国全図』の内容から判明する。すなわち、九重天図の記載およびポルトガル国名表記は初版のままであるが、李之藻序文の初行および第二二行が第三表に示す如く改訂を見ている。第一次の改訂は明らかに李之藻の指示によるものであり、第二次の場合はマテオ・リッチの指示であるが、その時期は万曆三十一年（一六〇三）七月に李之藻が福建学政に任命されて北京を離れる以前である。このとき、李之藻は版木を郷里杭州に持帰つ

たとリツチが回想記に述べているからである。第一次の改訂は恐らく初版刊行後間もない時期であり、朱思本では時代が新し過ぎると判断した李之藻が唐の賈耽にまで時代を遡らせ、シナの科学的地図学の出発の早いことを誇示せんがためであった。リツチ回想記によると、李之藻が郷里に帰った正規の版木のほかに、彫版師たちが無断で彫った別の版木が北京にあり、それは万曆三十二年（一六〇四）七月の北京を襲った豪雨により彫版師の家が倒壊した折、損壊したという。その後、いつのことかは明確でないが、版面が著しく損傷し使用に耐えない版木はこれを新調し、埋木で済む程度のもは埋木によって補修した版が作られ、その版木群を用いて清代になってから刷られたのが、オーストリア国立図書館所蔵本である。一時帰国していたイエズス会士イントルチェッタ（殷鐸澤）が一六七二年（康熙十一年）に神聖ローマ皇帝レオポルト一世に献上したものであり、「大明海」「大明聲名」云々の「明」と「清」字のみを墨書とする「大清一統」（シナ本土および北半球図の二ヶ所）とが混在している。また、アフリカ地名のサントメ島やセントヘレナ島の表記が、現存明刊本の「仙多默島」「仙衣力拿島」とは異なる「聖多默島」「聖衣力拿島」に改められている。これは西洋語の知識なくしては行えないことであり、補修版の製作にはイエズス会士の関与があったとせざるを得ない。音訳の「仙」ではなくて意訳の「聖」を用いているのは、天啓三年（一六二三）刊の艾儒略の『職方外紀』であり、彫版師に補修版の製作を促したのは、案外彼であったかも知れない。そうだとすれば、補修版がこの年前後につくられた可能性も生じてくる。ロンドン王立地理学協会本が、清代に刷られたものであることは明らかであるが、ウィーン本との共通点が多いことからすれば、版木はそれと同じであったと見てよいであろう。ただし、「大清海」の「清」、「中國聲名」云々の「中國」がもしも埋木による改訂である

ならば、ウィーン本が刷られたのちに版本に手を加えているわけであり、清代に入つての改訂版つまり工人模刻本補修第二版ということになるが、その判定は将来を待つほかない。

註

(1) 詳細は左記の拙稿に記述がある。拙稿「明・清におけるマテオ・リッチ系世界図」『新発見中国科学史資料の研究』(山田慶児編) 論考篇、一九八五年、京都大学人文科学研究所(拙著『東西地図文化交渉史研究』(二〇〇三年、清文堂出版)所収)

(2) 『両儀玄覽図』は、ソウル市、崇実大学校博物館および遼寧省博物館にそれぞれ所蔵されており、前者所蔵本の大型単色複製は、『地理学史研究』第一集(昭和三十一年、地理学史研究会)に、後者所蔵本の大型原色複製は、『中国古代地図集、明代』(一九九四年、北京、文物出版社)に収載されている。

『坤輿万国全図』原刊本の所蔵先および複製文献は次の通りである。

ヴァチカン図書館 (D'Elia, P. M., *Il mappamondo Chinese del P. Matteo Ricci S. I.*, 1938)
宮城県図書館 (同館による覆刻本(二三分の一に縮小)昭和

五十六年、講談社刊『日本古地図大成、世界図編』昭和五十年、船越昭生『『坤輿万国全図』と鎖国日本』『東方学報』京都第四一冊、昭和四十五年〈付図〉、臨川書店覆刻本〈分割原寸大〉一九九七年〈解説には何らの新見解なし〉) 京都大学附属図書館(禹貢学会覆刻本(二八分割)一九三六年〈再版、一九六七年大安刊〉但し、部分修正あり)

ロビンソン文庫 (*The Library of Philip Robinson, Part II, The Chinese Collection* by Sotheby's, 1988, No. 86, 第六幅上部三分の一) British Library, *Chinese & Japanese Maps*, 1974 第四幅の東・東南アジアは *The Geographical Magazine*, vol. 47, No. 12, 1975) 国立公文書館(旧内閣文庫 主図のみ)(船越昭生前掲論文付図)

オーストリア国立図書館 (Österreichische Nationalbibliothek, *Kartographische Zimelien*, 1995)
ロンドン王立地理学協会 (Royal Geographical Society) (Badeley, J. F., 'Father Matteo Ricci's Chinese

World-maps', *Geographical Journal*, vol. 50, No. 4, 1917, 折込3頁大)

- (3) 青木千枝子「日本に現存する『坤輿万国全図』諸図について」『キリシタン文化研究会会報』一〇二号、一九九三年

- (4) 江戸時代の模写本については、土浦市立博物館編刊『世界図遊覧』（一九九六年）に一覧表があり、二八点が著録されているが、亀山市歴史博物館所蔵本とこの一覧表にはない津市図書館稲垣文庫本との二点は、現存明刊本の模写であり、例外として扱わねばならない。

- (5) 『アジア歴史事典』第八巻、一九六一年、平凡社刊、「フランク」（和田博徳）

左記の文献によると、元来は地中海東岸のヨーロッパ人を指して呼んだベルシャ語の Farang とあるところ。

馮承鈞『西域地名』一九五五年、中華書局

- (9) D'Elia, P. M., *Fonti Rucciane*, vol. 2, 1949, p. 60
（川名公平訳『中国キリスト教布教史』一〈大航海時代叢書第二期8、岩波書店、一九八二年〉四一五頁）

- (7) 平川祐弘『マテオ・リッチ伝』I 昭和四十四年、平凡社（東洋文庫）、七九頁

- (8) 左記の文献に単色複製図版がある。

土浦市立博物館編刊『世界図遊覧——坤輿万国全図と東アジア——』一九九六年

- (6) D'Elia, P. M., *ibid.*, vol. 2, p. 472（川名公平訳前掲〈註6〉書、二〇一九八三年〉一六〇—一六一頁）

- (10) D'Elia, P. M., *ibid.*, vol. 2, p. 473（川名公平訳前掲〈註6〉書、二〇一九八三年〉一六二頁）

- (11) 洪煥蓮氏は左記の論文において「刻工某刻板」と称し、川村博忠氏は左記の論文において「工人模刻版」という呼称を用いているが、「刻」の文字があれば刊本であることは明瞭なので、「工人模刻本」と呼ぶこととする。

洪煥蓮『考利瑪竇の世界地図』『禹貢半月刊』五卷三・四合期、民国二十五年

川村博忠「オーストリア国立図書館所蔵のマテオ・リッチ世界図『坤輿万国全図』」『人文地理』四〇巻五号、昭和六十三年

- (12) 方豪『李之藻研究』民国五十五年、台湾商務印書館、一九五頁

リッチ回想記第五書第三章にも、

李之藻は前年（一六〇三）挙人の試験監督を務めるために、シナで最も著名な文人たちにいる福建省へ派遣された。（D'Elia, P. M., *ibid.*, vol. 2, p. 312 川名公平訳

前掲〈註6〉書、二（一九八三年）二八頁）

とある。天啓三年（一六二三）当時においても版本が李之藻の郷里に置かれていたことは、艾儒略の『職方外紀』に寄せた彼の序文（天啓三年）に、

遂為_レ訳以_レ華文、刻為_三万国図屏風_一。（中略）因_二其版已携而南_一、中貴人翻刻以_レ応。

とあることによって明らかとなる。

(13) 『明史』のこの記事は早く洪煥蓮前掲（註11）論文（二六頁）において紹介されている。

(14) 「この船が沈没したのは、その年（一六〇四年）の豪雨で川が氾濫したためであった。北京の市街でも家々が倒壊して、非常に大きな被害が出た。」（第五書第一章）

(D'Elia, P. M., *ibid.*, vol.2, p.281 川名公平訳前掲

〈註9〉書、二（一九八三年）二二頁）

(15) D'Elia, P. M., *ibid.*, vol.2, pp.473-474（川名公平

訳前掲〈註9〉書、二（一九八三年）一六二—一六三頁）

(16) D'Elia, P. M., *ibid.*, vol.2, p.472（川名公平訳前

掲〈註6〉書、二（一九八三年）一六一頁）

(17) 洪煥蓮氏も、内府刊本については詳細を極める明末の劉若愚『酌中志』巻一八「内版経書紀略」に坤輿万国全図の名がないことから、宮廷での版刻はなかったと判断して

いる。洪煥蓮前掲（註11）論文、二六頁

(18) (19) 複製図版掲載文献については第二表を参照された。北平歴史博物館本の大きさは、『東方雜誌』二〇巻九号（民国十二年）の同図説明記事によると、各幅七尺×三尺（二二四×九六cm）であり、南京博物院本については、全体の大きさを『中国古代地図集、明代』（前掲〈註2〉および『中華古地図珍品選集』（前掲〈第二表〉）が一九二×三四六cmとし、『世界図遊覧』（前掲〈第二表〉）が一六八・七×三八〇・二cmとしている。いずれにしても、南京博物院本は北平歴史博物館本に比べてかなり小さい。模写本の故であろうか。なお、南京博物院本の原色複製は『中国古代地図集、明代』にも収められているが、色調がすぐれない。

(20) 洪煥蓮氏によると、ニコラス氏は北平交民巷台吉廠理格（ニコラス）洋行の主人であり、図の大きさおよび着色状況は北平歴史博物館本と同じであるとニコラス氏が語ったという。洪煥蓮前掲（註11）論文、三頁

デリア氏は単に左記の文献に単色複製図版を掲げるのみで、これと言った説明はない。図版にも文字が読めるほどの鮮明さはない。D'Elia, P. M., *Il mappamondo Chinese del P. Matteo Ricci S. I.*, 1938, Tavola XXX

(21) 左記の文献に単色複製されている。

Day, J. D., 'The Search for the Origins of the Chinese Manuscript of Matteo Ricci's Maps', *Imago Mundi*, XLVII, 1995

(22) 奉先寺本は、昭和七年（一九三二）の京城帝国大学『朝鮮古地図展観目録』（二二頁）に、
写 彩色 一隻 一七〇×四九四種
と記載されており、写真印画は左記の文献に掲載されている。

鈴木信昭「朝鮮肅宗三十四年描画入り『坤輿萬國全圖』攷」『史苑』六三卷二号、二〇〇三年

戦火による焼失その他については、左記の文献に拠った。

李燦「韓国に伝来した坤輿万国全図について」『世界図遊覧』（前掲〈第二表〉）

(23) 主としてこの図を扱った論考に次の如きものがある。

船越昭生「朝鮮におけるマテオ・リッチ世界地図の影響」

『人文地理』一三卷二号、一九七一年

Debergh, M., 'La carte du monde du P. Matteo Ricci (1602) et sa version Coréenne (1708) conservée à Osaka', *Journal Asiatique*, CCLXXIV, 1986

(24) 故宫博物院明清檔案部所蔵本は、中国社会科学院考古

研究所『中国古代天文文物図集』（一九八〇年、文物出版社）に複製されており、その解説は、同『中国古代天文文物図集』（一九八九年、文物出版社）四〇一～四〇八頁にある。ロビンソン文庫本は前掲（註2）の *The Library of Philip Robinson, Part II, The Chinese Collection* に複製図版（四頁大）があり、大きなはその記載に拠った。ヴァチカン図書館本は左記の文献に複製されている。

Harley, J. B. and D. Woodward, *The History of Cartography*, vol. 2, Book 2, University of Chicago Press, 1994, pp. 570, 571

(25) 『西洋新法曆書』治曆緣起に次の如き記事が見える。

第四次進呈書目

五緯総論一卷

（中略）

恒星屏障一架

係遠臣湯若望製

崇禎七年七月十九日具題（一一五―一二七丁）

この図が八幅であったことについては、この記事に先立つ李天経の疏に、

（前略）内有輔臣所報恒星総図八幅（後略）（一二四丁）とあることによって知られる。なお、この図の刊年につい

てはすでに前掲(註24)の『中国古代天文文物論集』において考証がなされている。

- (26) 黄伯禄『正教奉褒』光緒十年(一八八四)刊、第二四丁

- (27) 記事は極めて簡単であるが、『増補文献備考』(一九〇八年刊)卷一象緯考に、

金墉曰、西洋人湯若望、作_二時憲曆_一、自崇禎初、始用_二其法_一、行_二於中国_一。(中略)丙戌(海野注、一六四六年)奉_レ使入燕時、率_二曆官一人_一、欲_レ学_二於湯_一、而門禁甚嚴、不_レ能出入。只買_二其書_一、而還。(第六丁、句読点・返り点は筆者)

と記載されている。

- (28) 南北両半球星図の上部の記事の末尾には、「雍正元年歲次癸卯／極西戴進賢立法／利白明鐫」という原刊本の記載が転写されている。原刊本は銅版であり、国立国会図書館に所蔵されている(四一三二一)。なお、『天象列次分野図』とこの図とを描く朝鮮製の屏風(八曲一隻)は、国立国会図書館(特二一一八八四)および英国ケムブリッジの Whipple Museum of Science に所蔵されており、前者所蔵本は破損著しいことにて閲覧停止であり、後者所蔵本は左記の文献に写真版がある。

Harley J. B. and D. Woodward, *ibid.*, vol. 2, Book 2, p. 567

- (29) 『天象列次分野図』は、洪武二十八年(一三九五)刻石の『天象列次分野之図』を模写したものであり、その石碑は昌慶苑に、肅宗十三年(一六八七)に改刻の石碑は世宗大王紀念館にそれぞれ所蔵されている。また碑面の図を木版にしたものもある。写真版が左記の文献に掲載されている。

全相運『韓国科学技術史』一九七八年、東京、高麗書林、三三頁(改刻碑)・三五頁(木版)

Harley, J. B. and D. Woodward, *ibid.*, vol. 2, Book 2, pp. 562, 565

- (30) 詳細な説明ならびに複製図版は左記の拙稿に寄られた。

拙稿「湯若望および蔣友仁の世界図について」『東西地図文化交渉史研究』(前掲〈註一〉)

- (31) 『中国科学技術典籍通彙』天文卷第八冊(一九九三年、河南教育出版社)所収影印本(八六五頁)

- (32) 前掲(註2)の *Kartographische Zimelien* に原色複製されている。

- (33) 川村博忠前掲(註11)論文

青木千枝子「オーストリア国立図書館所蔵の『坤輿万国全図』について」『汲古』二五号、平成六年

(34) 青木氏は「黙大□刺」を「黙○入刺」と記載しているが、川村論文(註11)第三図によってそれが誤りであることは明白である。

(35) 地名の原綴りは左記の地図に拠った。

ラングレン (Langren, A. F.) 『ギネア、トリニロン、インゴラ海岸図』(J. H. van Linschoten, *Itinerario*, Part 3, 1596, 付録)

(36) Giles, L., "Translations from the Chinese World Map of Father Ricci", *Geographical Journal*, vol. 52, No. 6, 1918, vol. 53, No. 1, 1919

単色複製図版は前掲(註2) Baddeley, J. F. 論文のほか、左記の文献にも掲載されている。

D'Elia, P. M., *Il mappamondo Ciniese del P. Matteo Ricci S. I.*, 1938

(37) 鮎澤信太郎『地理学史の研究』昭和二十三年(昭和十五年、原書房覆刻)六七一六八頁